

鍵盤楽器を使用した授業の可能性について ～コードの仕組・伴奏の工夫の観点から～

広島県立西条農業高等学校

1 はじめに

「限られた授業時数の中で、生徒が生涯音楽を愛好し、音楽と関わっていくことができるようにするために授業で何を伝えたらよいか。」また「高等学校における授業を通して何を学んでおけば今後の音楽活動に役立つのか。」私自身が受けた高校までの音楽の授業を振り返って、そのように考えることがよくある。音楽理論に焦点を当てたとき、コードを知っておくと伴奏やハーモニーを付ける時に大変便利であるし、コードはギター等を弾く時には必ず目にするものである。したがって、コードの仕組については、生徒に確実に理解させたいという思いで年間授業計画の中に組み込んでいる。また、学習指導要領の「A 表現（1）器楽」の指導事項「エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して演奏すること」を受けて、コードとも関連を図りながら、伴奏を工夫する授業を展開してきた。

転勤を機にキーボードを使用しての授業を試みた際に、同じことを目的として授業を展開したとしても、ギターを使用するかキーボードを使用するかで生徒の理解度や表現の工夫の幅に大きな違いがあると実感した。今回は、ギターを使用しての取組とキーボードを使用しての取組を比較しながら、鍵盤楽器を使用した授業の可能性について、私が感じたことをまとめたいと思う。

2 ギターを使用しての取組

前任校（県立広島工業高等学校）には音楽室にあるグランドピアノ以外は鍵盤楽器がなかったが、クラシックギターは1人につき1台あったため、ギターを使用して授業をする際にコードの仕組の学習、伴奏を工夫する学習を行っていた。

（1）教材曲について

教材曲は『カントリーロード』とした。C, G, Em, Dの4種類のコードで伴奏することができ、いずれのコードも演奏の際はセーハ（左手の人差し指を伸ばして複数弦を同時に押さえる技術）を用いずに演奏できるため、初めてギターを演奏する生徒にとっても技術的に無理がないと考えた。また、メロディーを演奏する際も開放弦で演奏できる音が多く、タブ譜があれば比較的短時間で演奏が可能である点においても教材として適していると考えた。

（2）コードの仕組の説明について

『カントリーロード』にでてくる4種類のコードを例に、コードの仕組を次の手順で解説した。

- ① コードネームを表すアルファベットは英語音名であり、その音が根音である。（英語音名は既習事項である。）
- ② 根音から1つ飛ばし（＝3度）に3つ並べたものがコードの基本形である。（例：ド・ミ・ソ）
- ③ 3度には「長3度」と「短3度」がある。長3度と短3度は半音（ミファまたはシド）が含まれているかどうかで判別する。

- ④ 根音と第3音の音程が長3度で、第3音と第5音の音程が短3度の関係が成り立っているものをメジャーコード、逆に根音と第3音の音程が短3度で、第3音と第5音の音程が長3度の関係が成り立っているものをマイナーコードと言う。

「D」については、メジャーコードであるため根音と第3音が長3度でなければいけないのに、「レ」と「ファ」は短3度になっているため、「ファ」に#をつけて長3度にする、という説明を行った。ただ、#やbをつけて音程を変化させる説明になると生徒の反応は途端に悪くなり、理解させるためには反復練習が必要だと感じた。

(3) コードの理解を確実にするための練習問題について

ドリル形式のプリントを作り、毎時間メジャーコード1問、マイナーコード1問を授業のはじめに解かせるという取組を行った。解いた後にすぐ回収し解説を行うが、生徒それぞれつまづいているポイントが違うため、次時までそれぞれに生徒が解いたプリントに解説を書くようにした。回数を重ねるごとに生徒の理解度は確実に上がったが、ギターでコードを使って伴奏を演奏する際にはコードの仕組みを知らなくても困らないため、コードの仕組みを学習する意義が生徒に伝わらないことが課題であった。

(4) 伴奏を弾くための技術的な取組

ギターで『カントリーロード』の伴奏を弾く際に、次の①～④の順で授業を進行した。

- ① メロディーに合わせて、コードを押さえて1回ストロークしたら、次のコードを押さえてまた1回ストロークができるようになる。
- ② 1小節にストロークを1回～4回としていくなど、段階的に回数を増やしていく。(回数が増えるほど、コードチェンジのスピードを上げなくてはならないため難易度が上がる。)
- ③ アップストローク、ダウンストロークを駆使して様々なリズムでのストロークを体験する。
- ④ アルペジオ奏法の基本を身に付ける。(コードを左手で押さえて、右手はp,i,m,aの順にはじく。)

(5) 伴奏の工夫をする取組

(4)のように、ストロークやアルペジオでの伴奏について基礎的なことを生徒に身に付けさせた後、歌詞等を参考に自分なりの伴奏を考えて弾く活動を行った。アルペジオについては、複数弦を同時にはじくこともでき、様々なバリエーションができることもあり、表現の幅が広がることを伝えたが、右の親指で何弦を弾くかがコードによって違うことが要因で、生徒は「取り入れたいが難しい。」や、「メロディーに合わせて弾けるようになるには時間がかかる。」という感想を述べていた。

<生徒の伴奏の工夫例とその理由>

- ① 曲の前半は1小節に1回ストロークをし、途中から1小節4回に変える。サビを盛り上げたいから。
- ② 1小節に2回ずつストロークをする。最後は静かに終わりたいので、ストロークを1回に減らす。
- ③ 前半は歌詞の内容からもしっとりした感じなので、アルペジオで伴奏をする。サビから目立たせたいため、ストロークに変える。

クラスのほぼ全員が、①や②のようにストロークの回数を途中で変化させるという工夫にとどまった。回数についても、ダウンストロークのみで弾ける1小節に1～4回という生徒がほとんどであった。そ

のような伴奏にした理由を記述させたところ、上記の例のように「盛り上げたいから回数を多くした。」
「静かな感じにしたいから回数を少なくした。」という記述がほとんどであった。中には「前半は1小節に2回コードが変わるところがあつて難しいから、ストロークを1回にした。」というように、目指す雰囲気に合わせて伴奏を工夫したのではなく、技術的にできることをしたという生徒もおり、「伴奏の仕方により曲の雰囲気が変わることを感じ取ってほしい。」「いつも1小節に4回ストロークというような弾き方ではなく、演奏する曲をどういう雰囲気にしたいかによって様々な伴奏を使い分ける楽しさを味わってほしい。」という私の思いは伝わりきっていないと感じた。また、③のように曲の一部分でもアルペジオを用いて伴奏をした生徒はクラスで1割程度しかいなかった。アルペジオについては、弦を弾く順番を変えたり、複数弦を1度に弾いて和音を出したりするなど、様々なバリエーションでの演奏が可能だが、1曲の中で変化をつけられた生徒は1人もいなかった。

3 キーボードを使用しての取組

現在の勤務校である西条農業高等学校の音楽室には、1人1台のキーボードがある。これを使わない手はないと考え、今までギターを使って行っていた取組をキーボードを使って実施することにした。

(1) 教材曲について

教材曲は『歓喜の歌』とした。この曲は右手でメロディーを弾く際も、左手でベース音を弾く際も手のポジションをほとんど変えずに弾けること、メロディーのリズムが容易であることから、教材曲に設定した。また、伴奏についてもC、G、Dmの3種類のコードで弾くことができるという点で、弾けるようになるために時間を使いすぎることなく、伴奏の工夫に力を入れることができると考えた。

(2) コードの仕組の説明について

右図は「MOUSA1」（教育芸術社）の「コードの覚え方」のページに掲載されているものである。これを参考に、根音、根音から鍵盤5つ分の音、さらにそこから鍵盤4つ分の音で構成されているのがメジャーコード、逆に根音、根音から鍵盤4つ分の音、さらにそこから鍵盤5つ分の音で構成されているのがマイナーコードという説明を行った。なお、長3度、短3度という言葉については教えていない。

著作権保護の観点により掲載しません。

(3) コードの理解を確実にするための練習問題について

毎時間授業の初めに、メジャーコード、マイナーコードのコードネームを各1～2個ずつ言い、鍵盤でどこを押さえるか考えさせ、実際に音を出させて確認を行った。

この方法で授業を進めるときのメリットは次の5点である。

- ① 生徒の目の前に鍵盤があるため、説明をもとにすぐに鍵盤を数えられる。
- ② 音を出して響きを確認できる。メジャーコードの響き、マイナーコードの響きを自分で音を鳴らしながら感じ取ることができる。
- ③ 「周りから聞こえる響きと自分が出している音の響きが違えば答えが違う。」ということに自分で気づくことができる。

- ④ セブンスコードについても、「第5音からさらに鍵盤4つ分か5つ分かによって、メジャーセブンスかセブンスかに分類される。」という説明でほぼ全員が理解をした。
- ⑤ シャープやフラットがつく事例についても、同じように鍵盤を数えることで導くことができるので、特に混乱も見られなかった。

毎時間生徒はこの練習問題に意欲的に取り組み、周りの生徒と主体的に確認しあう様子も見られた。コードネームから押さえる和音を導く力が付いているため、教材曲以外の曲も、コードネームが記入してありさえすれば伴奏をすることができると考えられる。授業で学んだことを今後の音楽活動に生かしていくことができるという、正に私が望んでいる形だと実感した。

(4) 伴奏を弾くための技術的な取組
 授業で配付した楽譜と手順を記したプリント

歓喜の歌

ステップ	内容	チェック
STEP1	楽譜通りに両手で演奏する。(②) できたら左手をすべての指で弾いてみる	① ②
STEP2	左手を三和音にして弾く、コードネームを()に記入する。	
STEP3	三和音を右手で、ベース音を左手で弾く。	
STEP4	STEP3をベースに、リズムをいろいろと変えてみる。	
STEP5	三和音をアルペジオにしてみる。	
STEP6	いろいろなパターンを試してみて自分なりの伴奏を考える。	

STEP 1 から 6 へと、順を追って進めていった。STEP 3 までいくと、左手でベース音、右手でコードを弾くという基本形ができるようになるという計画である。ベース音については「右手の親指で弾いている音の1オクターブ下の音である。」という指示の仕方をした。慣れるまでは両手を同時に見る余裕がなく、コードが変わるときに両手の移動に時間がかかる生徒もいたが、ほとんど「C」と「G」の行き来で弾くことができるため、慣れてくるにつれて全員が弾くことができるようになった。

(5) 伴奏の工夫をする取組

(4) で示した手順で言うと、STEP 4～6 にあたる活動である。

STEP 4

STEP 4 では、「C」の基本形(右手でコード、左手でベース音を両方とも全音符で弾く)をもとに、次のことを体験させた。

- ・右手のリズムを変化させる。
- ・左手のリズムを変化させる。
- ・両手ともリズムを変化させる。



右図のように例を示し、弾いて説明しながら生徒にも弾かせてみた。例に載せているもの以外も、4拍に収まりさえすればどのようなリズムでもよいので、いろいろと試してみるよう促した。生徒は付点のリズムにしたり、連打したり、四分音符と八分音符を混ぜてみたりと試行錯誤する様子が見られた。

次に、「伴奏のリズムによってどのように雰囲気が変わるか」について、次の3点に沿ってプリントにまとめさせた。

- ① リズムを細かく刻むほど…
- ② 右手のリズムを刻む、左手のリズムを刻む、両手ともリズムを刻むのを比較すると…
- ③ その他、例以外に試したものについて感じたこと

<①についての生徒の記述>

- ・刻みが少ないと落ち着いた感じなのに対して、刻みが多いと賑やかな感じ、弾む感じがする。

<②についての生徒の記述>

- ・右手を刻む方が音が高いから楽しそう。
- ・左手を刻むと、明るい中にも落ち着きを感じる。
- ・ベースが動くと明るいノリが良い感じになる。
- ・両手とも同じように刻むとまとまった感じがする。
- ・両手とも刻むと伴奏っぽい。明るく楽しい。

- ・両手とも刻むと音に奥行きが出る。複雑さが増す。
- ・片手だけを刻むときっちりとした感じがでる。質素。

<③についての生徒の記述>

- ・リズムが左右でずれている方が楽しい感じを出すことができる。
- ・同じリズムで右を動かすか左を動かすかによって全然雰囲気が違う。

①については、ギターを使用して授業をしたときにも生徒から出てきた意見（ストロークの回数を増やすほど明るい感じになる。）であるが、②や③に対する生徒の記述を見ると、両手を使えることにより表現の幅が広がるとともに、様々な雰囲気を生み出すことができるということに生徒が気付いていることが分かる。

STEP 5

<アルペジオの例>

STEP 5では、アルペジオにチャレンジさせた。

まずは、「ドミソしか使っていない。」と生徒に伝え、「ドソミソ」「ソミドミ」など「ドミソ」を使ったアルペジオを私が弾き、生徒に真似をさせる活動を行った。生徒は聴いた音から鍵盤を鳴らしてみながら、同じように弾くことができた。その時点で、生徒はギターの時より簡単にアルペジオも用いて伴奏を試行錯誤できると感じた。

次に、STEP 4と同様に上記のような例を示し、ピアノで弾いて説明しながら生徒にも弾かせてみた。その結果、③のように左手でアルペジオを弾くのは右利きの生徒にとってやや難しそうではあったが、①のように単音であれば全員が弾けると確信した。

例以外にも「4拍に収まるように。」という注意のもと、生徒に試行錯誤させた。まとめとして、私が「和音で伴奏しながらメロディーを歌う」と、「アルペジオで伴奏しながらメロディーを歌う」の両方を聴かせ、「アルペジオで伴奏すると和音で伴奏するのと比較してどのように雰囲気が変わるか。」についてプリントに記入させた。

<生徒の記述>

- ・アルペジオの方が本格的な感じですごくピアノが弾ける感じがする。
- ・童謡に合う感じがする。
- ・流れるような感じ、なめらかな感じがする。
- ・和音で弾いた時は拍をとっている感じだったが、アルペジオだと控えめな感じでメロディーを引き立たせる感じになる。
- ・優しい雰囲気に変わる。

- ・寂しい感じがしてバラードなどに合うと思う。
- ・例②のように和音が混じったアルペジオは、和音だけより柔らかい感じになる。
- ・左手をアルペジオにすると音が多く賑やかになる。

ギターの時と比較すると、鍵盤楽器の経験がない生徒でも、例に挙げた①～③については実際に自分で音を出すことができたため、「アルペジオ」と一言と言っても、表現に多様性があることを感じ取ることができたと考える。

STEP 6

STEP 6 では STEP 4・5 を参考に、『歓喜の歌』の伴奏を自分なりに工夫して弾く活動を行った。基本的には、1 曲すべての伴奏を考えるように指示したが、弾くこと自体がやっとという生徒については、頭から 8 小節をしっかりと取り組ませることとした。考える上では、どのような『歓喜の歌』にしたいのかという「目指す雰囲気」を大切にさせた。

創作した伴奏を記譜することは一切していないため、生徒の作品が楽譜として残っていないが、次のような工夫が見られた。

<生徒の伴奏の工夫例と目指す雰囲気，セールスポイント>

- ①「歓喜の歌」という題名からも、活気がある感じにした方がいいと思った。
→右手の和音と左手のベースをどちらもスタカートで弾く。
- ②3 段目だけメロディーが変わるので、伴奏も変えて目立たせようと思った。
→3 段目だけ右手をアルペジオで演奏する。それ以外は和音を四分音符で弾く。
- ③右手の和音より左手のベース音をたくさん弾く方が前に進む感じがすると思った。
→右手の和音は全音符で弾く。左のベース音は四分音符と付点のリズムを織り交ぜたりリズムにする。

全体的には右手で和音を刻みながら伴奏をした生徒が多く見られたが、刻み方にはたくさんのバリエーションがあることを踏まえ、複雑なリズムで弾くことにチャレンジしている生徒もいた。4 分の 4 拍子なので、4 拍に収まるように気を付けさせたが、記譜をさせなかったことで様々なリズムに果敢にチャレンジできたのではないかと考えられる。また、ギターを使つての実践時と比較すると、アルペジオで弾いてみようという生徒が増えたという実感があった。

4 おわりに

キーボードを使用しての授業を初めて行うときの生徒の反応は、決して肯定的ではなかった。授業実施前に鍵盤楽器の経験についてのアンケートをとったところ、「鍵盤のドの位置が分からない。」と回答した生徒が 37.5%いた。また、「両手で弾くことができる。」と回答した生徒は 12.5%であり、私が想像していた以上に経験がない生徒が多かった。ある男子生徒は鍵盤楽器の経験がなく、「ピアノなんて絶対に無理。難しいに決まっている。」と嘆いていた。しかし、実際に授業を進めていくと、鍵盤楽器の経験の有無に関わらず、生徒は主体的にコードの学習に取り組み、嬉しそうに和音を奏でていた。伴奏を弾くくらいであれば、手の大きさや指の動きが問題になることもほぼないと感じた。そういう点でも、鍵盤楽器には、生徒に楽典を理解させたり、音楽表現の創意工夫をさせたりするため手段として大きな可能性があると感じている。

現在の勤務校では、教育課程上、音楽Ⅰしかないため、授業時数の関係から教材曲以外の曲でコードネームが載ったものを提示し、伴奏を付けられるのかどうかについて確認することができていないことが課題である。題材と題材を常に関連付け、発展させながら授業を展開していけるよう心がけていきたい。また、現在の勤務校のようにキーボードが複数台ある学校ばかりではないため、1人に1台のキーボードがない環境において、どのように展開すれば、鍵盤楽器を用いて楽典の理解や、音楽表現の創意工夫を図れるかについても模索していきたい。